

天皇の年代比較:

<参照>「古代日本「謎」の時代を解き明かす」(長浜浩明著)

長浜説による天皇在位を検証しました。下表は、長浜氏の表を、一部、私見により数値修正しています。

代位	諡号	日本書紀				実年					
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
		崩御年齢 歳	崩御年 西暦	即位年 西暦	在位年数 数	崩御年齢 歳	在位年数 数	修正在位 数	単純即位 歳	修正即位 歳	推定崩年 西暦
		b	A	B	c=A-B+1	d=b/2	e=c/2,c	E	f=d-e+1	F	-71
初代	神武	127	-585	-660	76	63.5	38.0	38.0	26.5	26.5	-33
2代	綏靖	84	-549	-584	36	42.0	18.0	18.0	25.0	25.0	-15
3代	安寧	57	-511	-548	38	28.5	19.0	14.0	10.5	15.5	-1
4代	懿德	77	-477	-510	34	38.5	17.0	17.0	22.5	22.5	17
5代	孝昭	113	-393	-476	84	56.5	42.0	42.0	15.5	15.5	59
6代	孝安	137	-291	-392	102	68.5	51.0	51.0	18.5	18.5	110
7代	孝靈	128	-215	-290	76	64.0	38.0	38.0	27.0	27.0	148
8代	孝元	116	-158	-214	57	58.0	28.5	29.0	30.5	30.0	177
9代	開化	111	-98	-157	60	55.5	30.0	30.0	26.5	26.5	207
10代	崇神	120	-30	-97	68	60.0	34.0	34.0	27.0	27.0	241
11代	垂仁	140	70	-29	99	70.0	49.5	49.0	21.5	21.5	290
12代	景行	106	130	71	60	53.0	30.0	30.0	24.0	24.0	320
13代	成務	107	190	131	60	53.5	30.0	30.0	24.5	24.5	350
14代	仲哀	52	200	191	10	26.0	5.0	5.0	22.0	22.0	355
皇后	神功	100	269	201	69	50.0	34.5	34.0	16.5	16.5	389
15代	応神	110	310	270	41	55.0	20.5	21.0	35.5	35.0	410
16代	仁徳	83	399	311	89	41.5	44.5	18.0	-2.0	24.5	428
17代	履中	70	405	400	6	35.0	3.0	3.0	33.0	33.0	431
18代	反正	60	410	406	5	30.0	2.5	2.0	28.5	28.5	433
19代	允恭	78	453	411	43	39.0	21.5	21.0	18.5	19.0	454
20代	安康	56	456	454	3	28.0	3.0	3.0	26.0	26.0	457
21代	雄略	124	479	457	23	62.0	23.0	23.0	40.0	40.0	480
22代	清寧		484	480	5		5.0	5.0	-4.0		485
23代	顕宗	38	487	485	3	38.0	3.0	3.0	36.0	36.0	488
24代	仁賢		498	488	11		11.0	10.0	-10.0		498
25代	武烈	57	506	499	8	28.5	8.0	8.0	21.5		506
26代	継体	82	531	507	25	41.0	25.0	28.0	17.0	14.5	534
27代	安閑	70	535	532	4	35.0	4.0	3.0	32.0	33.0	537
28代	宣化	73	539	536	4	36.5	4.0	3.0	33.5	34.5	540
29代	欽明		571	540	32		32.0	32.0	-31.0		572
30代	敏達		585	572	14		14.0	13.5	-13.0		585
31代	用明		587	586	2		2.0	2.0	-1.0		587
32代	崇峻		592	588	5		5.0	5.0	-4.0		592
33代	推古	75	628	593	36	37.5	36.0	36.0	2.5	40.0	628

(注) a 列：古事記の崩御年齢については、割愛しました。同書では神武即位を、紀元前 B C 7 0 年としている。

<私見>長浜説への疑問

長浜説は、推古崩年 6 2 8 年を起点として、天皇の在位・崩年を春・秋で年 2 歳という説を取っている。この考え方は、紀元前の縄文・弥生時代の稲作の年齢の数え方で、仁徳以前の長寿については当てはまる部分もあるが、仁徳以降については当たらない。2 倍説では、唐・宋の学者にすぐに、ばれるだろう。(中国・朝鮮の史書との比較や、記紀の「神代・人代」の分岐基準、および神功皇后の 120 年引き延ばし、竹内宿禰の 307 歳などについては、説明されていない。)

仮に、この方法で、天皇の在位年数・崩年が数年でも擦れれば、B C 6 6 0 年も擦れてしまう。実際に、天皇崩御の後、殯(もがり)期間を置いている場合があって、次の天皇即位が 2 ~ 3 年遅れるなどの擦れが生じることがある。また、神武即位の根拠は、何か、示されていない。(B C 6 6 0 年の神武即位は、6 0 年周期(辛酉説)によって、予め決められたと考えるべきである。)

<考察：年齢と在位>

在位の3倍説と年齢の2倍説は、基本的な考え方が異なる。

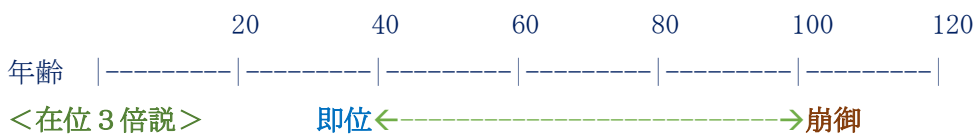
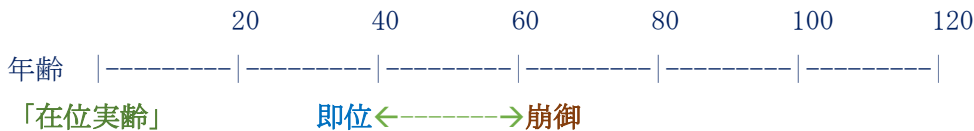
在位：(時間軸)を60年周期で3倍に伸ばす場合、60年毎の「干支」は全て同じになる。

年齢：(寿命)を単純に2倍に伸ばす場合、崩年と継続する人の「干支」との調整が難しくなる。

舎人親王は、時間軸を3倍にした上で、年齢を2倍位とすれば、「干支」を維持できると考えた。

方法として、「即位から崩御まで」天皇在位年数を3倍として、即位までの年齢は実齢を使った。

<方法：年齢と在位>



<書紀：例> 神武天皇：45歳出立＋7年東征 ⇒ 52歳即位（神武元年）
<実齢> ＋在位25年 ⇒ 77歳崩御
<3倍> ＋在位75年（25年×3倍）⇒ 127歳崩御となる。

※年齢2倍説では、即位の年齢と「干支」が極端に崩れてしまう。

即位年齢を動かす場合は、エピソードも変えなければならなくなる。

では、神武の実態（和暦／西暦との関係）はどうだったのかとなるが、

書紀の編纂者は、天皇紀・国紀に基づき、磐余彦尊（狭野尊）が、高皇産靈神（高木神）と、素戔鳴（国津神系）・天照（天津神系）の両方の系統を引継いでいて、紀元元年に最も近いと思われていたのであろう。

長浜説では、紀元元年は、第4代懿徳天皇が最も近くなるが、日本書紀にはほとんどエピソードが出てこない。また、海部氏の勘注系図および豪族との婚姻関係なども無視されているように思われる。

（※この長浜表では、AD241年に崇神が崩御としているが、AD248年は、台与が女王になった年で、勘注系図では、開化と結ばれている。開化の次が、崇神だから年代と順位は前後してしまう。）

<ヤマト国の場所>

長浜説では、邪馬臺国は、北九州にあると比定している。倭人伝の戸数（人口比）から、北九州か奈良かの二者択一との考えらしい。大阪平野は当時、海の湾であって、奈良まで陸行一月はないとしている。

（※難波から飛鳥までは、徒歩3～4日程度だから、奈良ではない。だからといって、北九州だと決めつけることはできない。国の戸数・人口は勢力範囲であって、人口密度と面積比ではない。

地震・気象や火山・災害などが原因で、稲作など平地の利便性を考慮して、集団移動すれば人口は変わる。）

<私見> 自説

●紀元前

仮に、磐余彦（狹野命）を紀元前80年頃の生まれとすると、先代旧事紀・石切剣神社の記述と符号が合う。（※この場合、「人代」の始まりが、紀元前となるが。）

磐余彦が高倉下と会い、長脛彦と戦うには、同時代でなければならない。

また、神武東征後、饒速日の娘：伊須気依姫（＝御歳姫）を妃としている。

鵜茅葺不合を書紀の一書にある天忍穗耳の末弟（＝熊楠日）とすると、磐余彦と天香語山（海部氏）は、時期が重なる。（※海部氏東征を摺り替えるにはちょうど良い。）

そうすると、神武⇒（綏靖—安寧）継承は、（紀元前30年頃～紀元30年頃）の間となる。

しかし、その後に空白期間が生じる。婚姻関係を見ても、「懿徳～孝昭」への継承が不自然である。

●紀元後

書紀の編纂者は、この空位期間を無くすために、（鵜茅葺不合—磐余彦）を、（瓊瓊杵—火遠理）の系統の後に付け替えて、神武即位を**紀元61年（＝紀元前660年）**に、遅らせたのだろう。

海部氏系図を隠蔽してしまえば、年代と系図を意図的に、引き延ばすことが可能となる。

この空白が、倭人伝の「倭国大乱・無主の地」の遠因を作ったとも考えられるが。

●後漢の「漢委奴国金印」（懿徳の某兄：常根津彦の陰影がある）が、**紀元57年**である。

朝廷は、「人代」の始まりを、漢の冊封（属国扱い）ではない独立国家であることを示すために、**神武東征**を重ねて、委奴国を征服（隠蔽）し、北九州を支配したように見せかけたと考えられる。

懿徳の「懿」は、＜壹+恣（ほしいまま）＞と書く。「懿」の文字は、政変を表している。

例：衛の懿公好鶴（鶴を好んで民を顧みず）。司馬懿（仲達）の政権略奪など。

<私見：倭国大乱>

倭人伝は、「倭国大乱」を、桓帝・靈帝の間：西暦146～189（約40～50年間）としている。

饒速日東征後の大和は、海部氏の支配領域。神武東遷後は、権力と権威が共存する状態になる。

※倭人伝は、紀伊水道より、東の倭国について、意図的に記載していない。

- ・北九州勢力：饒速日側（中臣氏）を支持。
- ・南九州勢力：磐余彦側（大伴氏）を支持。
- ・四国地方：高天原の権威（忌部氏）を支持。
- ・中国地方：素戔嗚の権威（物部氏）を支持。

と仮定すれば、瀬戸内海は、東西南北にそれぞれ、支持勢力が異なる。

そのため、瀬戸内海の支配権を巡って、氏族・部族間で、主導権争いになったと考えられる。

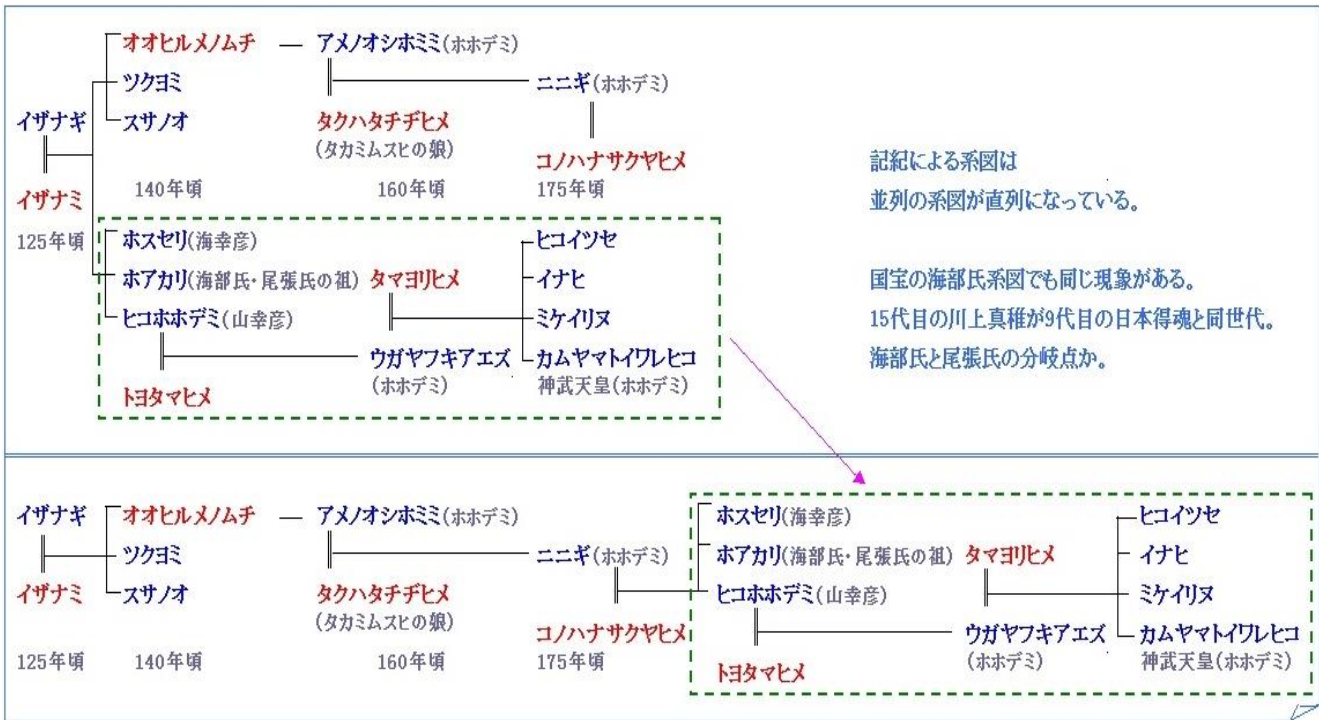
※その後、穴門（長門）の伊都都彦が、関門海峡の王で、「誰も通さない」と言ったのも頷ける。

最終的に、地域代表の豪族が話し合っ、高天原の権威（高木神）に戻って、海部氏出身の大靈女（日巫女）を「王位」に充てることで、決着したのではないだろうか。

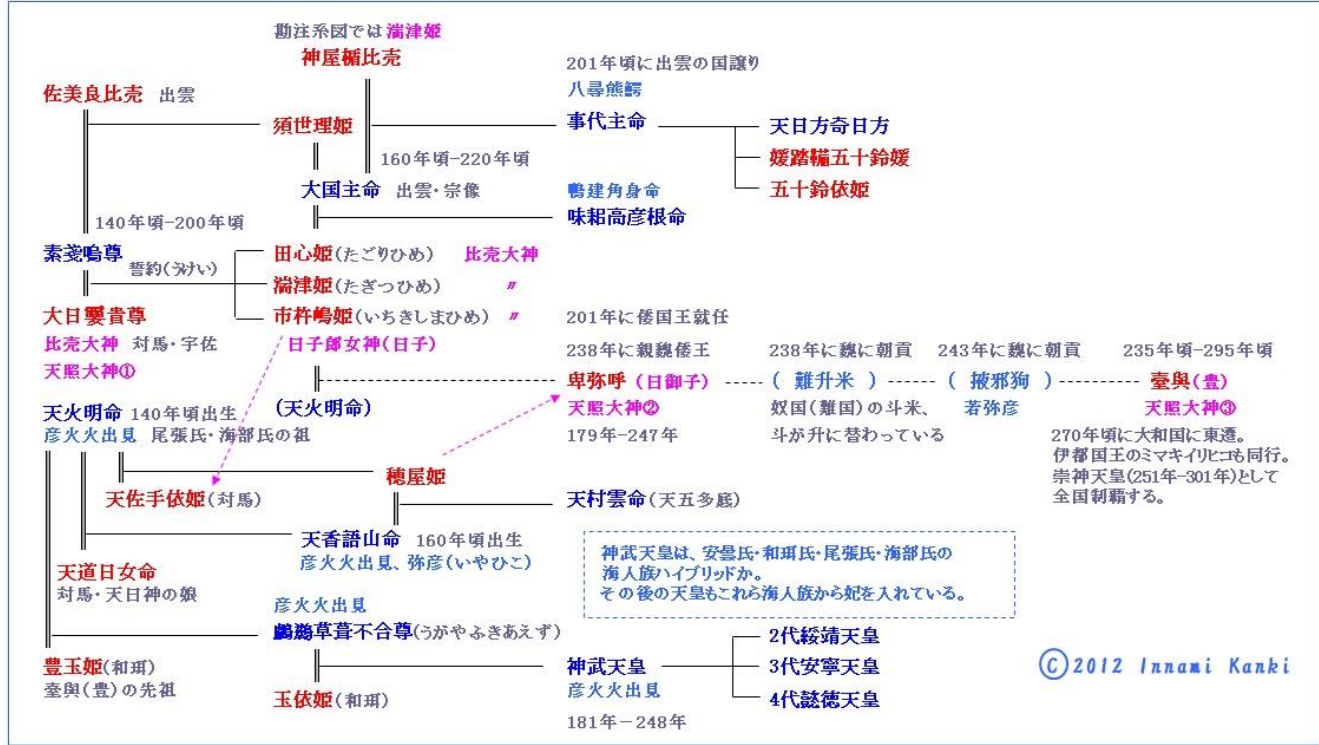
※国の支配権「王位」は、皇位継承権「皇統」とは別物である。

※倭人伝は、一度も、天皇について触れていない。

神と天皇の関係については、日本独自の価値観・歴史観に基づくものである。

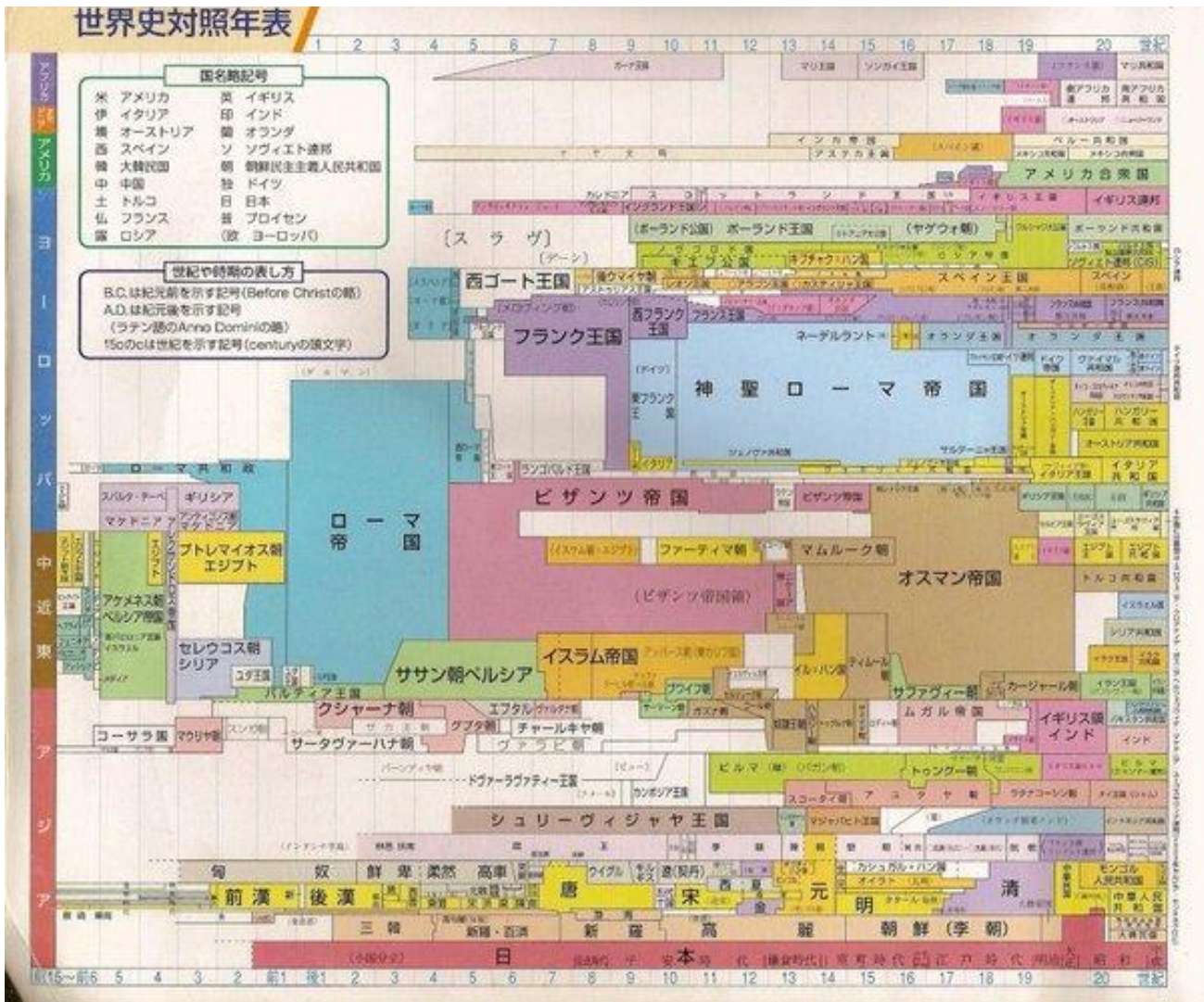


この系図は、「たちばな研究会」の復元図とは、異なりますが、
この系図から明らかにわかることは、**並列系図を→直列系図に改竄している**ことです。
即ち、年代を3倍に引き延ばすために、**緑色の点線枠**: 瓊瓊杵尊の後に「山幸彦」を付けている。



この表も、当研究会とは、年代にかなり食い違いがあるが、いくつか参考になる点がある。
この表では「天道日女命」は、対馬の天日神の娘(≡瀬織津姫)となっている。
※饒速日東征に従った「天造日女」(安曇氏)とは別人である。

<参考> 世界史王朝年表



この年表では、日本の王朝スタートを紀元前 110 年くらいに置いているようだ。
 この年代を饒速日東征時期と関係づけるか、或いは、書紀の崇神年代と位置付けたのかどうか。

この時点を、古事記の言う「神代・人代」の分岐点とすると、
 これ以前にも、世界史では「王朝」が存在するが、日本史では突然「神代」となってしまう。